

## 創造性と鑑賞性（續）

倉 橋 惣 三

人格活動の態度として我々に起つて來る問題の中に、鑑賞的態度と云ふものが又大きなものであります、近來は何方かと云へば創造性の教育の方には兎に角非常に注意が向つて居るのであります、而して是が所謂近代教育の一つの大きな傾向、又努力となつて居ります、が人格活動の態度に關する觀念の教育的考慮と云ふ點から云へば、鑑賞的態度に關する方の教育が忘れられては居ないかと云ふことを思ふのであります、是は必ずしも我國の現状に就て言ふばかりでなく、一般に其趣があるとも云へるか知れませぬ、鑑賞と云ふことに就て美學者は種々に論じます、之を一々漁つて行きますれば非常に複雑な問題になります。何故我々が鑑賞出來るか、又或は主觀主義、或は客觀主義、或はそれが結付いて來ます所の共觀の説、どんな所に鑑賞的作用が出來るかと云ふことの説明は可成り難かしい、面倒なことでもあります。併し私の茲に問題としたいのは、其鑑賞と云ふことが働く方の見方ではなく、人格活動の態度としての鑑賞の特殊性と云ふものを見る事であります。同じく人格活動の態度でありますからして、獨創性、或は創造性と並べて比較的に見る方が便利であります。創造は、私の今申上げた所に依れば個性に依つて個性が個性を産み出す所のものである、言換へれば何處までも其基礎の個性と云ふものが始めにして終なるものである、個性あるが故に創造が出來、出來て居るものが個性的色彩を持つて居る、始めから終りまで、個性を以て始まり個性を以て終る所のものであります、個性と云ふことは人間の差別觀に屬するものであり、創造は其中に倫理が活きる所以であります、創造と云ふ人格活動をして居ります時にのみ我が完全に其

所に生きる、他のものに模倣するのでなく、我と云ふものが、我と云ふものに於て徹底的に生きて行くのである。社會生活、或は普通の道德生活の意味に於けるやうな自己主義、主觀主義ではありませぬ、けれども、矢張り一種の個性と云ふ現れに於ての自己本位のものであります。

鑑賞と云ふ人格活動の態度は是と反對するものでありまして、鑑賞は必ず鑑賞の對象を持つて居るのであります、對象と自分とが結付くのである、鑑賞の場合に於ては自分が對象の中に這入り込むのであるか、向ふを自分の中に這入り込ませるのであるか、それは主觀主義を執るか、客觀主義を執るか、いづれにしても人格活動の態度としては對象の中に自分が這入り込んで居る其時は、既に自分と云ふものは滅して仕舞つて居るのであります。況んや此一箇の對象に對してはAもBもCも之を鑑賞する、Aも對象の中に這入る、Bも對象の中に這入る、Cも對象の中に這入つて、鑑賞して居る時に於てはABC悉く自己の差別と云ふものがなくなつて、仕舞ふ、鑑賞對象の中に同化せられた一種の平等的のものになつて仕舞ひます。

創造は何處までもオリジナリティー、個性を以て創造的に進んで行くのに對して、鑑賞は常に自己を没却する所の生活に這つて行くのであります。美學者は茲の所を説明して、心理學的の言葉を以て言ふならば、鑑賞の態度と云ふものは自己としての意志活動性を失つて居るものと云ふことを言つて居ります、此點は恰も模倣と云ふこと、外觀に於て似て居る所があります、皆が或る物を模倣して、自己を無くなして、手本にのみ皆が從つて行く生活をして居る時には、Aも或る物を手本とし、Bも同じものを手本とし、Cも同じ物を手本として居る時には、差別性がなくなつて來る、併しながら所謂模倣と云ふ言葉を以て現して居る人格活動の態度に於ては、矢張り自分の方が本體になつて向ふの手本を自分の中に採り用ひて居る所の態度であります。採り用ふることも忘れて其手本の中に這入つて仕舞つた時には、模倣の状態から鑑賞の状態に變つて來る、外形は似て居りませうが、人格活動の態度としては丸切り違つたものになるのであります。個

性を本位として産み出して行く所の創造生活と云ふものは、之を藝術的に見れば、其作品を本位にして見るからして、自  
から見方が違つて参りますけれども、人格的に見るならば、其差別性が主になりまして、道徳的、社會的のものではありません  
すまいが、矢張りを己を主とする所の生活になる、人格活動の態度は一方で行つたことは、それだけで切離せるもので、  
他の人にも移つて行き、所謂人格活動全體と云ふもの、中にそれが融けて、自から創造と云ふ生活に於ては社會的、道徳  
的、意味に於ける主義ではないけれども、人格活動の中に融け合つて、他に染み移つて來る點に於ては餘程主義的な色々  
の生活の色彩を帯びて居ります、茲に或は傲慢、或は自分を誇る、或は自分を自分で味ふと云ふやうな  
何處までも自分と云ふものがこびり附いて居る人格活動の傾向を帯びて來ます、是は實際に藝術家、或は發明家などのキ  
ャラクターに於て常に見る所でありませう。勿論例外も澤山にあります、例外ではなく、或は其方が本當かも知れませぬ  
が、仕事に於ては獨特であつて、其人の人格活動の調子は少しも主義的でない人も澤山にあります。あの所謂普通人肌  
の、所謂創造性の非常に勝つて居る人の中に於て、所謂意地張りで、勝氣で、自分本位の、傲慢で、なか／＼下らない、  
なか／＼己を高うすると云ふやうな、さう云ふ趣と云ふものは當然ある、少くも其己を高うし、己を中心とする生活の反  
對であります所の謙遜、或は物を尊崇するデボーション……必ずしも社會的、道徳的生活の意味で言つて居るのではあり  
ませぬか、人格活動の其本質としてのさう云ふ態度と云ふものは餘程少くなつて來ます。之に對して鑑賞と云ふ態度は、  
自分を伺ふの中に始終入れて生活して居りますからして、鑑賞して居る其時は何もそれ自身社會的、道徳的意味に於ける  
意義を持つたものでありませぬけれども、自分を物に入れて居る所の、見上げてゐる、見詰めて居る、己を忘れて居る、  
自失してゐると云ふやうな態度と云ふものは自から性格全體の方に染込んで來て、ハンブル、デボーションと云つたやう  
な生活態度と云ふものを造る方の傾を持つて居ります。是が直ぐに倫理的に取扱はれべきやうな道徳的行爲となつてどう  
現れるかと云ふやうなことは暫く申さないとしまして、其人の行爲の、態度の中に於ては絶えず己を主にして、己を誇り

己を發揮すると云ふやうな心持の中に、他に或るもの、中に己を入れて、或るものに己を低うして、向ふを仰ぐと云ふやうな心持の生活の態度の中に或る一つの本質となつて貯へられて來ます。人は必ずしも宗教信仰者に直ぐになるか、或は非常に謙遜な人になるか、是れは又複雑な問題でありますが、さう云ふ態度と云ふものが其所に貯へられて來る、我國の——假りに他の國は見ませぬで、——我國の教育として、人格活動の態度に關する教育方面の考慮と云ふものは比較的少くないかと云ふことを思ふのであります、其自分を對照の中に入れて仕舞つて、所謂忘我の鑑賞状態に入らせるには、對象と自分との關係でありますから、其原因となるものは或は對象にあり、或は自分にあり、或は兩方にあると云ふことになることは當然なことでありませう、今まで自分で新しい流派を立てやうと思つて、小さい個性發揮や、小さい創造生活に唯驅られて居つたものが、驚くべき偉い名工に接しますと、そこに謙虛な心持になつて其中に引入れられて仕舞ふと云ふのは、其名工の方が偉いからであります、自分は自分で自分の個性から産み出すと云ふ、自分を主にした心ばかりが起りますけれども、それが起らなくなつて、其人をして鑑賞の生活に入らしめて來ると云ふことは、それが非常に偉い對象であるからである、自分には自分の考がある、どの説も服するに足りないかと云ふやうな心持を持つて居る者も、若し非常に偉い著述家にでも會ひましたりすると、そこに全然忘我的に、鑑賞的に其中に遁入つて仕舞ふと云ふものは、其對象が偉いからであります、併し其對象が偉いと云ふことは、其對象と關係した意味に於ては自分の方を低く見て居ると云ふことに當然なります。詰り偉大なるもの、前には低くめられると云ふ経験をそこで生ずるのであります。一つ一つの経験が心性の上に於て或る一つの痕跡を印するものとして、さう云ふことを繰返して居る中に自から鑑賞するに足るものがあるならば、——鑑賞することが出来る、それは言ふまでもなく一時的のことではなく、——蓄積に依て其心性、人格、性情の上に於て或る痕跡を止め、容易に鑑賞し得るやうな、態度になり得るものとすれば、鑑賞は自分の方に鑑賞し得る態度と云ふものが考へられる、之を鑑賞性と申します。或る人はそんなものは下らないものであると思ひませう、それが下

らないものであるか、下らないものでないかは、是は大きな人生の考へ方に關係して來ることでありますからして、此處では其問題には觸れない方が便利だと思ひますが、兎に角非常に偉いものに打突かりますと我ながら鑑賞の態度となる、我々は繪を見て一つも鑑賞の態度になつたことはない、院展の繪を見て一つも鑑賞の態度になつたことはないと言ふ畫家がある、けれども和蘭に行きましてレンブラントの名畫の前に立つた時には小さい自分を主にした、或は批判し、或は拒絶して居つた其態度も、あのレンブラントの大きな名畫の前には己を失ふて鑑賞の態度になる、或はどんな音樂を聞いても一度も自分が鑑賞の態度にならない、又小さい音樂の前には一度も自分は鑑賞の態度になつたことはないけれどもあの大きなワグネルのタンホイゼルの大音樂を聞いては、全く己の批判性を棄て、仕舞つて、さうして鑑賞の態度になると云ふことは、是は否定することの出来ない事實であります。

藝術と云ふものに對してさう云ふ經驗がなければ景色に對しても宜いのであります、何でもないと批評して少しも鑑賞する態度に出でない人でも流石にあの花の吉野山に遊びに行つて、其景色を見ては呆然として言葉も出ないと云ふやうなことはあることでありますし又さう云ふことがあつたからと云つて、決して自分として恥かしいことでも何でもないと云ふことが云へると思ひます、其經驗を繰返すことに依つて今までは何を見ても鑑賞すると云ふやうな方へ向かなかつたキヤラクターが鑑賞するに足るものがあれば潔く謙虚に跪いて鑑賞すると云ふ様なさう云ふキヤラクターに變つて行くこと云ふことも是は考へられると思ひます。勿論さうなりましても下らぬもの、前に鑑賞するのではない、鑑賞するに足るものでなければ鑑賞しない位の權威は捨てないのでありますけれども、併し鑑賞すると云ふ習慣が少しも養はれて居なかつた其キヤラクターを、鑑賞するに足るものがあつたならば容易に鑑賞し得るやうな鑑賞性を所有するものに變へると云ふことは是は有り得ることだと思ひます。鑑賞性が養はれましたならば、鑑賞するに足るものに對しては鑑賞性の養はれなかつた前の或は鑑賞性をてんで養はれて居ない人に比較すると容易に鑑賞する、それがもう一步進んで來ますと云ふと鑑

賞するに足るものを求むる心と云ふものに變つて來ます。個性にコレスボンドしたる創造の生活を生み出さうとするものも、生れ出したいと云ふ所まで行つて初めて本當の創造性となるとするならば、鑑賞性も亦、鑑賞するものがあつたら鑑賞し得ると云ふ受身の態度から、鑑賞したいと云ふ態度になる、之を假に其問題の最も人間的に多少特殊な著しい鑑賞となつて居ります宗教と云ふやうなことに就て云つて見るとすると、宗教と云ふものは勿論模倣に依つて出來るものではありませぬ、——もう少し大きなものでなければならぬ、随分中には模倣と云ふ所を脱出しない宗教生活もありますが、殊に宗教と云ふものが社會現象として行はれて居ると云ふ意味の宗教生活に於ては非常に多く模倣性が傳つて居ると云ふことは是認されるが、眞實の信仰生活と云ふものはさう云ふものでないと云ふことは認められます。——けれども、宗教に對する自己抑止でありまして、跪いて崇める、縋つて高めて行く所の其生活、是は對象本位のものでありますけれどもなかくそれが出來ない、差別觀の強い人にはそれがなかく出來ない、併しながら降參しなければならぬ大宗教に觸れた場合に於ては其中に入れられる、併し其宗教に這入つたことは其偉い對象の力に依つて這入つたのでありますけれども、又一面に於ては自己を引下げることによつてそこに行き得る宗教的訓練を受けて居ります子供、それは容易に拜むべきものに向つては拜み得る心を、養はれて居る子供、其は宗教性のある子供と云ひませう、何も直に判然した信仰對象を確立するまでに行かなくつても拜み得るものならば拜むやうな心、容易に拜める心持と云ふやうなものが出來て居れば、宗教性があると云へます。

併しもう一步進んで云ふと拜めるものがあつたならば拜みたいと云ふ心持が人間に出來て來る、何かを拜みたい。西行の山家集などを繕いて見る時などにはさう云ふ氣持がする、西行は何を信じて居つたか、何を拜んだか、西行は拜みたい心を以て山や野を歩いて居つたと云ふことが感ぜられる、だから西行には色々のものが拜めたのであります。斯う云ふ風には鑑賞的生活の一つの例として宗教を持つて來たのであります、持象を本位とする生活、さう云ふ風なものには

ぬと云つて仕舞へば其人の人生觀次第でどうでも宜いことであります、殊に生存競争を本位にする所の生活などに於ては斯う云ふことは云へないやうなものでありますけれども、人間性と云ふものを人格活動の態度と云ふことから色々考へて行けばさう云ふ方面も亦大いに考へて行かなければならぬと思ひます、實際問題は此處では出来るだけ避けると云ふより其暇がないのでありますが、我が國の小學教育或は幼稚園に於て此方面は非常に足りないやうに思ふのであります。近世の外國の教育でも亦非常に其點が缺けて居りまして、所謂中世紀風の鑑賞生活を主にした教育に比較すれば非常に其點が缺けて居ります、けれども流石に矢張大きな藝術を持つ大、きな宗教を持ち、大きな音楽を持ちて居る國、又先生達が子供の時から鑑賞性を養はれて居る先生に依つて教育されて居る其教育に於ては、教育論として或は實際やつて居る現在の状態に於てはそつちを餘り意識して届りませぬけれども、可なり其方が働いて居ることを見るのであります。

扨て、鑑賞と云ふものは自分に向ふの中に入れて仕舞つて對象の中に自分を小さくする生活であります、己を小さくする、己を下ける、己を空しうすると云ふことは、對象たるものが自分より偉大なるものである限りに於て、或は偉大さの程度に於て、小さくすると云ふことは、自分を下けると云ふことは、高まることで、失ふことは持つことである所の向上の生活と云ふものがそこに與へられるのであります。創造生活は此小さい自分の個性と云ふものを本體にして其個性から自分の個性に相應するものを生み出さうとするので、幸にして人類の中に於て自分の個性が最も偉大なるものであつたならば人に貢獻する所もありませう、併し自分に取つてそれだけである、どう骨を折つた所でどうせ自分が拂へるものは大抵定つたものであるけれども、其高い對象の中に自分を入れてさうして自分が高くなる、此處に人間向上の法則と云ふものがあるのであります、生存競争を……現在の生活を、此現在の自己と云ふものを本體にして考へる生活に於ては、創造だけて宜しいと申上げました、併し現在の自分と云ふものを高めて行くと云ふことを、全體の人類を高めて行くと云ふことを、其エレベーションと云ふことを育教の大きな仕事と考へて行く時には、鑑賞の教育をしなければならぬし、鑑賞すべ

きものがあつたならば鑑賞し得るやうな鑑賞性を養はなければならぬし、更に進んでは、どつかに高く己をエレベートして呉れるものを求める其鑑賞性を養はなければなりません。それが缺けて居つたならば、人格活動の態度としての教育は一方に偏して居ると云ふことを思ふのであります。鑑賞と云ふことは鑑賞するに價する對象に對する態度であると云ふことも出來ます、併しながら既に鑑賞せんとする心を持つまでに自分の方に鑑賞性が出來たとするならば、鑑賞し得ないものはなくなつて來る。

私は或る時妙な經驗をした事があります。私は創造主義或は自發主義と云ふやうな自動本位の問題に就て考へる辭があるので、自然圖畫教育と云ふやうなことに付きましても自由畫と云ふものを非常に尊重する考が私の中にある、寫生と云ふやうなことは、物を寫す或る圖畫のテリニツクを教へるに過ぎないと云ふやうな考が、非常に幼稚な考でありませうが私のどこかにありました。所が或る時ちよつとしたことで縁側で——信州小諸に於ける經驗でありましたが、——木の葉を見て居りました、其木の葉の中の實に一つくと云ふものが皆違つて居ると云ふことを極めて平凡なことであります。氣が付きまして、違つて居ると云ふことは誰でも知つて居ることではありますが、違つてゐるものは違つて居るものとして取扱はなくちやならぬと云ふ考がそこに起つて來た、木の葉を畫くと云ふことは、一つくくの木の葉を其儘に寫すと云ふことの中に木の葉を意識して行くと云ふ、其非常に大きな働があると云ふことを考へました、自分の小さい個性から生出した木の葉を畫くのぢやない、虫食つて居ても、それをそれとして見て行く所の、態度之が詰り有らゆるものに向つた鑑賞の態度として、私の云はうとする所であります。此意味に於て考へた時に寫生と云ふことが非常に意義を持つて來ると思ひました。此間或る美學者と、こんなことを考へて居る時でありますから、自然話が其方に向つて、ルーベンスが其繪を畫く時に御覽になつて居ると思ひますが、自分の妻君をモデルとして畫いて居り、或はロダンが自分の作物を作る時に其モデルと云ふものに非常な執着な關係を以て畫いた。近世の職業モデルと云ふものを、一時間幾らで金を出して前の時



間と後の時間と變つて仕舞ふやうなそんなモデルの使ひ方と云ふものは昔の藝術家はしなかつたものである、と云ふことを其美學者から聞きました。其二つのモデルの使ひ方の違ひ方と云ふものは人間と云ふものを自分の頭の中でクリエートして居る材料としてデッサンして居るならば、所謂プロフェクショナルモデルで宜いのであります、が併し人の一人々々を別なものであつて、其人を其人として、人間の一部分ではないと云ふやうな見方で其人を見て行く時に於ては、時間毎に變つて行くモデルで繪の畫ける筈がありません。色々のものを見る時に只それを材料として取つて來て、後は自分の結合で拵へて行かうと云ふ態度であれば必ずしも鑑賞と云ふことは要らないのであります、併しながら其ものを其ものとして尊重すると云ふやうな取扱ひをして行かうとする時、しなければならぬやうな氣が起つた時、そこに鑑賞と云ふものが起つて來るのであります。

今日藝術教育論に於て多くは創造に關する方面が説かれて居つて、鑑賞に關する方面は甚だ説かれて居りませぬが、假に鑑賞藝術の教育を此處にするとします、或は童語を聞かせよ、或は芝居を見せよ、ちよいと試みられて居るのであります、其時に若し子供に其舞臺に立つて歌ひました音楽者の歌を聞き只音楽を聞いた喜、只歌を聞いた面白味だけと云ふことを味はせる程度に止つたならば、それさへ出來ない者よりは非常に鑑賞性のある人間と云ふことは出來ませうけれども、もう一つ進んで本當の鑑賞と云ふものは、音楽の中の一つとして見ないで、それとして見て行く、今歌つて居るそれと云ふ、何處までも絶対にそれと云ふ所に重きを置いて見て行くのであります、そこまで鑑賞し得る態度を養つた時に本當の賞賞的教育と云ふものが出来る、鑑賞は對象の中に自分を入れると云ひましたが、多くの對象の中の一つへ入れたのでなく、其對象に限つて自分を入れたのである、今此對象を鑑賞して居る、其世界の中には他の何物もなくなつて仕舞ふ、只それだけがある世界。それが創造活動に於ては色々の材料を取つて來て、之を取らうかあれを取らうかと取つて來たものも都合に依つては捨て、それを只自己がコンピネーションして拵へる、それとは丸切り違つて對象それをそれ自身

絶對なものとして見て行く態度であります。

前に鑑賞の態度は意思活動と云ふものをなくして来る特性を持つて居ると云ふことを云ひましたが、理性の活動と云ふものをなくなして来る、鑑賞の最も嫌ふものは批判であります、創造生活の材料として此宇宙から色々のものを取つて来た時に於ては、批判が最も必要なものであります、鑑賞生活に於て、あるものに自己を入れて行く時に最も邪魔なものは批判であります、若し我々が批判だけの生活を以て暮して居つたならば常に何物をもそれ自身として自分の鑑賞の態度にすることは出来ません。下らない例でありますが、美術館に行きまして繪を見て居る、此繪は先刻見た繪より巧いだらうか拙いだらうか、此人の畫いた前の繪よりも、此繪はどうなつて居るであらうか、さう云ふ風な批判即ち比較の感が少しでも残つて居りましたならば本當にそれを鑑賞することは出来ない、鑑賞する時の態度はあの百も二百も掲げてある美術館の中に自分が前に立つて居る其唯一つそれ自身に自分を没入するのであります。今日の理性本位の教育に於きましては斯う云ふことは甚だ嫌はれ易いやうなことであります、出来ただけ鋭い理性を養つて出来るだけ鋭い批判性を養つて所謂比較批判に依つて辛うじて正しきものを見出して行けと云ふのが今日の我々が子供に與へて居る所であります。併しながら斯の如くして消極的には誤らざる程度に辛うじて行き得るか知れませぬが、その批判比較に依つて取出した之と云ふことに本當に自分が這入り込んで行く生活と云ふものは只比較批判的な教育では出来ない、それ自身として矢張這入つて行く絶對觀のある。教育の人でなければ出来ません。個人性格を本當に陶冶すればそこから社會的性格が出来ると考へるところとは大いなる誤りで、社會性格は社會性格として獨立に訓練されなければ發達しないものであると云ふことを申した事がありますが、矢張同様の趣意に依つて、批判比較の理性教育に依つて正しきものを見出し得るの力を子供に與へれば、自ら正しきものに本當に信賴する力が出来るかと考へるならばそれは間違である、絶對なものに這入り込む力、鑑賞の力、それ自身として自己をそれに入れて来る力、それは獨立養成するに非ざれば得られないものだと言ふことが云へませう、若し

さう云ふことが云へるとするならば今日我々のして居る教育と云ふものは随分其點に於て力弱いものでありはしないかと云ふことも思ふのであります。

鑑賞と云ふ言葉は藝術に多く使はれる言葉でありますが、併し鑑賞性と云ふことは人生全體に持つて來なければならぬ持つて來ることが出來ると思ひます。友達と仲良くせよと云ふ事は、多くの自分の傍に集る所の者に鋭き批判批評を加へて之を友達とする足るもならば、友達とするに云ふことではないのであります。言換へれば多くの人の中の一つとして其人を見ないで其人として其人だけを見得る所の鑑賞の態度に這入り得ると云ふことである、此のことは實に理性批判比較の性能が非當に、——所謂今日の教育を受けた人に、——發達して居りますから、夫となり妻となつても鑑賞の態度を以て絶對に没入の出來ない人がある、隣りの妻君と比較しながらじろく見て行く、他の人と比較して夫の收入を考へて居る、況んや日常生活に於て有ゆるものに就てそれ自身としてそれを自分に結び付けて其中に這入り込んで行く其生活と云ふことは甚だ缺けて居るのぢやないかと云ふやうな氣がするのであります。餘計なことではありますが、平常思つて居りますことですが、私も教育者の一人として申して見れば教育者と云ふものは生徒に對して可成り鑑賞的な態度を持たないものであります、比較批判と云ふことだけを以て生徒を見て居る太郎を見る時に太郎それ自身を見ないのであります、次郎よりも馬鹿だとか、三郎よりも利口だとか、抽象的な標準事實と云ふものを元にして色々見て居るのであります、或は又進歩と云ふことを考へ、發達と云ふことを考へるの結果昨日の太郎に比較して今日の太郎を見る、未來の太郎に比較して今日の太郎を見る、今そこに居る太郎その者を其人として見て行くと云ふやうなことに就ては、缺けて居るやうです現在の所ではさう云ふ風な趣が非常に多い、其眼で見られて居る子供にどう云ふ性情が附くかと云ふことも又考へられることでもあります。(完)